

蛇の王

アテナの涙がナイル川に無数の波紋を作っていた。

「わたし・・・、身震いするほど嫌われたなんて。」

「気に病むな。初めて見た人間は皆あんなものだろう？」

セトが諭した。

「でも、胸がとっても苦しいの・・・」

セトがアテナに擦り寄って慰めた。

「さて、これから、どうしたもんかのう。」

ラーがスズメの姿で首を傾げた。

「いずれにせよ、魔女に呪いを解いてもらうか、真実の愛を探すかしかないのだろ

う？」

セトが、ラーの前に座り、尋ねた。

「真実の愛は探しに行ってみつかる物じゃない。ならば、術者の下へ。奴がファラオ

を手に入れば、あるいは・・・」

セトが続けて言った。

「手に入れるって、そんな・・・」

「それは運命だ。抗うことは出来るが、結末は決められぬ。その場にいないければ、フ

ファラオを救うことも、己を取り戻すことも、共に手放すことになろう。私はそのため
にここにいる。」

セトは立ち上がり、じっとアテナを見詰めた。

「あなたの言う通り、それに彼女なぜそこまでファラオに固執するのか・・・、それ
も理解せずに争うのは違うと思う・・・」

アテナは自分の胸に手を当てて言った。

「問題は、あやつの根城^{ねじろ}が分からぬことじゃ。あえて、場所は告げなんだ。」

「そう言えばどうしてなのかしら？」

「なに、あやつにとってはファラオが呪いで亡くなれば黄泉^{よみ}の世界に連れていくこと
が出来る。そこでは永遠に愛し合うことが出来ると考えておる。共に現世で生きるこ
とは、彼がそう望めば付き合うにすぎぬからじゃ。」

「そう、彼女の望みはファラオの死なのね。セト、なにか手がかりはない？」

アテナの問いにセトは首を横に振った。

「やあ、また会ったね！蛇の女王！」

ワニのジョニーが川から飛び出し、金の腕輪を付けた手を振った。

「変わったメンバーだね。あ、ごめん、狩りの最中だった？」

「え？」

ジョニーはアテナからセト、ラーへと視線を移し、改めてアテナを見詰め返した。

「失礼な！私は彼女の護衛、餌じゃないぞ。」

セトが憤慨した。

「へえ、じゃあ、僕も混ぜてよ。面白そうだ。」

「ジョニー、今はちょっと……。でも、もしかしたらだけど……。頭に蛇が7匹
生えた魔女を知らない？」

「そんな面白い生き物がいるの！見てみたい！」

「知らないのね……」

「うん。それで、どんなところに住んでそうなの？」

「神殿とかなんとか……。そうね、石が積み上げられた祭壇とか洞窟かし
ら……」

「ふうん。なら、仲間に聞いてみたらいいじゃないか。」

「仲間？」

「そう、仲間。だって、そうでしょう？蛇が好みそうな場所だもの。魔女だって蛇を
頭に飼っているんだし。」

「そう、そうね！でもどこにいるのかしら……」

「蛇の王に会ってみたら？とても長く生きているから物知りだよ。」

「場所、分かるかしら？」

「もちろん！え？知らないの？」

「ええ、最近ここに来たから……。案内してもらえるかしら？」

「いいよ！でも、泳ぐから犬くんは僕の背中においでよ！」

「食うなよ……」

セトは、耳を伏せ、頭を下げて睨^{にら}んだ。

アテナは体をくねらせながら泳ぎ、セトはジョニーの背中に、ラーはセトの頭に乗
り、川に入った。

「お前は飛べよ！」

セトが頭の上のラーに向かって吠えた。

「ホッホ、かたいこと言うでない。」

一行はホルス神殿、アブシンベル神殿の巨象を眺めながら川を上った。

蛇の王の根城^{ねじろ}は、切り立った崖の下^{どうくつ}の洞窟^{どうくつ}にあった。洞窟^{どうくつ}の入り口はナイル川に浸っ
ていたが、奥に進むと水位は浅くなり、^{しまい}終には乾いた岩場に体を乗上げた。

「この奥だよ。ここからは上り坂を歩くから、僕はここで待っているよ。」

ジョニーは壁に背を預け、座り込むと、腕に顎^{そび}を乗せて休んだ。洞窟^{どうくつ}は真っ暗で、階
段状に続く道を息を切らせて進むと、広く開けた場所で行き止まり、セトが伏せでや
っと通れるほどの穴がそこに空いていた。

アテナが頭を入れてその穴を通り抜けると、高く聳^{そび}える岩壁に取り囲まれた広場に出

た。月明かりが煌々^{こうこう}と空から降り注ぎ、アテナの白蛇の姿を照らし出した。壁には無数の蛇達の瞳が光り、コロセウムで観戦する観客の様にアテナ達を見下ろし、体をくねくねと躍^{おど}らせ始めた。

♪ ここはっ、蛇の都市

♪ スニーカ

♪ 足もない

♪ 靴もない

♪ それでもここは、蛇の樂園

♪ スニーカ

♪ 蛇行して進め

♪ 後退は出来ない（蛇達が後退しようとするが出来ずに互いに絡み合い倒れる）

♪ 舌で匂いを探れ（蛇達が舌をチロチロ出す）

♪ 秘密の王国の手がかりを

♪ スニーカ

♪ 瞬きをせずに

♪ 瞼はない！

♪ 目を凝らして探せ

♪ 蛇の楽園

♪ スニーカ

♪ 心躍らせ

♪ 体くねらせ

♪ 踊れスネーク（蛇達は尾から頭にシルクハットをかぶり踊る）

♪ 奏でろスネーク（ガラガラヘビが尾をマラカスの様に震わせる）

♪ 歌えスネーク（シューッと舌を出す）

♪ ここは蛇の楽園

♪ スニーカ！

「何者だ・・・」

空気を震わせる低い声が木霊^{こだま}すと蛇達は踊りを止め、頭^{こうべ}を垂^たれた。周囲の壁からズルズルという音が絶え間なく鳴り響き、セトが身構えた。アテナが広場の奥に目を凝らすと、周囲の壁が螺旋^{らせん}を描いて押し迫り、大木の様な太い胴を持つ大蛇が頭をもたげて立ち上がった。

「アテナイの王女アテナと申します。突然の訪問をお許してください、陛下。」

「美しき姫よ、何用だ。」

蛇の王は目を見開き、アテナに顔を近づけた。黒曜石の様に刺々しく硬い鱗^{うろこ}が顔^{おお}を覆

っている。

「はい、頭に7つの蛇を生やした魔女を追っております。陛下であれば何かご存じではないかと・・・」

「ウム・・・。お主も何者かを奪われたのか？」

「はい、人生そのものを。え？陛下も何か奪われたので？」

「・・・息子たちだ。彼奴^{きやつ}の頭の蛇達は我が子らよ。」

「まあ！なぜ・・・」

「魔力を得るために取り込まれてしまったのだ。助けたくとも、彼奴と同化してしま
って倒すこともままならん。」

「居場所をご存じなので？」

「ああ、つい先日、末子^{きやつ}が彼奴の姿を見たお知らせをよこした。」

「その、場所を教えて貰うことは・・・」

「殺すのか？そこにおるのは軍神セトであろう？」

蛇の王がアテナを睨^{にら}みつけた。

「いいえ。我が呪^{ゆる}いを解くには魔女の赦しを得る事のみ・・・」

「もしくは・・・、真実の愛か。」

「え？」

王の思いがけぬ言葉に、アテナから声が漏れた。

「真実の愛を与えることが出来れば彼奴^{きやつ}の呪いは解け、息子らは戻ってくる。」

「なんてこと・・・彼女も呪いを受けていたのですか。」

「彼奴^{きやつ}は、元はエジプトの王女となる者だった・・・」

「まさか！」

「アテナイの姫よ、取引だ。彼奴^{きやつ}に真^{まこと}の姿を取り戻させるのだ。その時、我が子ら、
そしてお前の呪いも解けるやもしれぬ。」

「わかりました。彼女と話します。でも、教えてください。真実の愛とは何なのでし
よう・・・」

「難しい問いだな・・・、そうだな、相手の命を自分と同等以上に思える事。それ、
即ち愛・・・」

「自分と同等以上の命・・・」

「さあ、今宵はもう遅い、明晩^{みょうばん}再び来るがよい。末子に案内させる。」

アテナは頷いて答えた。

「蛇の王よ、感謝する。私からも一つ、蛇神アペプの居所は知らないか？」

セトが尋ねた。

「いや。気配は感じるが、巧みに姿を眩^{くら}ませているようだ。」

「そうか、わかった。」

「姫よ、また来るがよい。お主なら、喜んで息子の妻に迎えよう。」

「ははは・・・」

アテナは口元だけで微笑み、その場を立ち去った。

日光を浴び、人の姿に戻ったアテナは、翌朝、ロイが彫ったアテナ像の広場を葦^{あし}の陰から伺っていた。

「おや、姫様！」

親方が石を船に積んで戻ってきて、アテナの背後から声をかけた。アテナは驚いて、思わず飛び上がった。

「あいつならいませんぜ。」

親方はガックリと肩を落とした。

「え？」

「エジプト軍に入りましたよ。なんでもファラオの命が危ないとかで。貴方様の為に、すごい剣幕^{けんまく}で入隊金全部置いて今朝飛び出していきやがりました。」

「許されたのですか？」

「心に逆らうな。特に強い思いには、これがうちの家訓なんだ。そいつを盾に押し切られちゃったよ・・・」

「ロイ・・・」

アテナは、王都の方を振り返り、胸の前で手を組んだ。

「あ、姫様?!」

アテナは親方の呼び止めを無視して立ち去った。

「どうして急に入隊なんかしたんだろう？」

「さあて、ね・・・」

アテナの問いにセトが欠伸^{あくび}をして答えた。

「ぬううう!!」

ロイは、髭を胸元まで蓄えた巨漢の兵隊長と鏢^{つばぜり}合い^{あい}をしていた。

「せいや！」

ロイが剣を押し返すと、隊長は後方へ押し飛ばされ、よろめいた。だが、その後に切り込んできた隊長の刃が、ロイの剣を一撃で宙へ弾き飛ばした。

「お前の力は^{たい}大したもんだが、剣はド素人だ。身を守るために^{けいこ}稽古はつけてやるが、荷引きに配属する。」

「はい、分かりました。」

ロイは隊長が立ち去った後も、剣の素振りを止めなかった。

「何としても、強くならなきゃ・・・ファラオを守れば・・・、彼が魔女に頼んでアテナの呪いを解いてもらえるかもしれない！それしかないんだ！」

ロイは涙を拭いて、剣を振るった。

アテナは、泣きながら剣を振る彼をただ物陰から眺めていた。声をかけようと、一歩踏み出すも、ロイが自分に震えて後ずさりする姿が思い返され、彼に背を向けた。

「いいのか？」

セトが尋ねた。

「だって、なんて言えばいいの？それに、蛇の私が彼の側にはいられない・・・」

アテナは涙を拭いて、フードを被^{かぶ}るとその場を立ち去った。

その夜、蛇となったアテナは、ジョニーと共に再び、蛇の根城^{ねじろ}に戻った。洞窟^{どうくつ}の入り口の岩の上で赤茶色の蛇がアテナ達を待っていた。

「やあ、待っていたよ。オイラはケセム、よろしくな。」

ケセムは、ジョニーの上に飛び乗ると名乗った。

「ああ、よろしくね。」

ジョニーはゆっくりとした口調で告げた。

「ねえ、ケセム、ここから遠いの？」

「そうだなあ、かなり泳ぐよ。まず、あの丘の向こうまで回り込んで、そこから細い川に入るんだ。それから、あ、まずあそこに寄って！」

ジョニーはケセムに言われるがまま岸边に向かって泳いでいった。

アテナはため息をついて、首を横に振った。

「アテナ、動物たちに日を数える感覚はない。気長に行こう・・・」

セトがアテナを気遣った。

「うん、美味しい。さあ、あなたもどうぞ。」

ケセムがネズミを^{くわ}咥え、振り返ったアテナの鼻の上にそれを落とした。チュ

ッ・・・、両手を合わせてネズミは恐怖で震え、アテナを見詰めていた。

「きゃあああ！」

アテナは竜巻の様に水面から体をくねらせて飛び上がると、腹から勢いよく着水した。

水を^{かぶ}被りながら、ケセムが目を丸くしてアテナを見返している。

「ど、どうしたの?！」

「ごめんなさい。私、ネズミだけは苦手なの・・・。どうにも慣れなくて。」

ネズミは身震いするアテナを尻目に水面を泳いで逃げ、草むらへと姿を消した。

「ハハハハ！ネズミが苦手な蛇なんて初めて聞いたよ！」

ケセムはひっくり返って笑った。

アテナは、ロイが自分に恐怖し、地面で震えているのを思い出した。

「ああ、なんてこと。当たり前じゃない、こうなるなんて。なのに私ったら、独りで傷ついて・・・」

「まあ・・・、また会えるさ。今は進もう。」

セトが諭^{さと}した。

「ありがとう……。あなた、とっても優しいのね。」

「チッ……」

セトは、フィットと頭を振り、アテナから視線を反らした。

同じ月の下で

一行は更にナイル川を遡(さかのぼ)り、欠けてゆく月を日々見ながらアテナはロイに思いをはせた。アテナの本来の人の姿を川の水面が映し、彼女は歌い出す。

♪(アテナ) あなたは今、何をしているの？

♪(アテナ) あなたは今、何を考えているの？

♪(アテナ) あなたから逃げてごめん

♪(アテナ) 今、あなたに会って話せたらどんなにいいか

遠く離れた場所で、ロイは同じ月明かりの下、剣を置き、豆だらけの手で水を掬い飲み干すと、アテナを見送ったファラオの宮殿の前まで歩きながら歌い出した。

♪(ロイ) 君を怖がって、ごめん

♪(ロイ) 君をきずつけて、ごめん

♪(ロイ) ずっと友達だと言ったのに

♪(ロイ) 君に会ってごめんと伝えたい

♪(ロイ) 君もこの月をみているの？

♪(アテナ) あなたもこの月をみているの？

♪(アテナ) 私たちは同じ空の下にいるのに…

♪(ロイ) どうして会えないんだ

♪(ロイ) きみの顔が

♪(アテナ) あなたの声が

♪(アテナ&ロイ) こんなにも愛おしい

♪(アテナ&ロイ) もう一度会えたら

♪(アテナ&ロイ) 何を伝えるだろう？

♪(アテナ) 私が人に戻れたら…

♪(ロイ) 僕が想いを伝えられたら…

♪(アテナ) またあなたの側にいれるのかしら？

♪(ロイ) また僕の隣にいてくれるだろうか？

♪(アテナ) 私はこれからも月を見る

♪(ロイ) 僕はこれからも月を見る

♪(アテナ) あなたがそこにいると信じて

♪(ロイ) 君がそこにいると信じて

♪(アテナ) もう一度だけ…

♪(ロイ) もう一度だけ…

♪(アテナ&ロイ) 再び巡り会う、その日まで

水面に映っていたアテナの人の姿は波に消され、蛇の姿で彼女は月を見上げて佇んだ。

「泳ぐのはここまで。あとは砂地を少し歩けば、神殿が見えるよ。」

ケセムに続き、アテナは蛇の姿で川から上がった。

「それにしても何回見ても信じられないよ。人が僕らの姿になってたなんて。本当に

もったいないよ、君みたいな美しい蛇が・・・」

ケセムはずっと話続けている。

アテナは朝日を受け、人の姿に戻るのを待つが、蛇のまま姿が変わる様子がない。

「どうして？」

ケセムもジョニーも驚いて蛇の姿のままのアテナを見返している。

「呪いが進行しておる…」

ラーが語りかけた。

「これからも徐々に人の姿でいられなくなるだろう。」

アテナは俯^{うつむ}き、日が昇り、温かい日光が彼女を包むと、ようやく人の姿に戻った。

ケセムは、座り込むアテナの膝^{ひざ}の上に乗る、気遣うように頭をもたげた。

「ありがとう。」

アテナはケセムと、隣に寄りそうジョニーの頭を撫^なでた。

「ケセムよ、ここからどっちの方角じゃ？」

「南東に真っ直ぐだよ。」

「偵察^{ていさつ}してこよう。皆はここで休んでおれ。」

ラーが羽を広げ、砂漠の上を舞うと、切り立った峡谷の向こう、一枚岩の丘が見え

た。岩の丘の前には石柱が並び、ミイラ兵が周囲を巡^{じゅん}回^{かい}していた。ラーは目を見開い

て驚くと、上空を旋回^{せんかい}した。

アテナがウトウトと昼寝をしているとラーが膝^{ひざ}の上に降り立ち、「チチチ」と囁^{ささ}っ

た。

「う、うん・・・」

アテナが目をこすり、背伸びした。

「ラーのおじいちゃん、どう？行けそうだった？」

「^{こよい}今宵には着くだろう。だが、ミイラ兵だらけだ。」

「入れそうか？」

セトがラーに尋ねた。

「いや、入り口の警備は固い。」

「そうか。作戦が必要だな。」

「わしは、ファラオに知らせてこよう。主らはゆっくりと体を休め、エジプト軍が来

るまで時を待つじゃ。早まるなよ。」

「俺がみている。心配するな。」

セトが頷き、答えた。

ラーは再び空へと舞い上がり、太陽の中へと姿を消した。